

F.ケネーの経済思想

小 沼 宗 一

目次

- I はじめに
- II ケネーの生涯
- III コルベール主義批判
- IV 「経済表」の経済循環
- V むすび — 社会改革のヴィジョン —

I はじめに

本稿の課題は、経済思想史におけるフランソワ・ケネー（1694-1774）の経済思想の特質と現代的意義およびその限界について考察することである。本稿の構成は次の通りである。IIでは、ケネーの生涯を概観する。外科医であったケネーがフランスの農業改革に興味を示したのは、60歳を過ぎてからのことであった。IIIでは、ケネーのコルベール主義批判について考察する。ケネーの『経済表』（1758年）には、当時のフランスの経済政策を支配していたコルベール主義を批判するという、明確な時論的問題意識があった。IVでは『経済表』「範式」における経済循環について考察する。

ケネーは、農業労働のみが「純生産物」を生み出すと想定した。ケネーは、当時のフランスの農村の疲弊を解決したいと願ったが、そのためには、穀物の輸出入の自由化が必要であると考えた。穀物価格を「良価」まで引き上げることにより、高賃金と高価格が両立して、円滑な経済循環が可能であるとの見解が提示された。本稿は、ケネーの経済思想の最大の特徴を、彼の農業生産重視の見解の中ではなく、彼の社会改革のヴィジョンの中に見出そうとするものである。

II ケネーの生涯

フランソワ・ケネーは、1694年6月4日、フランスのパリの西近郊約40キロにあるメレという小さな農村に生まれた。彼の父ニコラはメレで農業をしながら、雑貨の小売を営んでいた。豊かな農家であったにもかかわらず、父ニコラは子どもの教育に無頓着であった。11歳になるまで、ケネーは読み書きを教わらずに育った。彼は、村の司祭から読み書きを学ぶようになり、プラトン、アリストテレス、キケロといった古典を読んだ（大田,2005,271-276）。

13歳の時、父を亡くしたケネーは、近郊の外科医のもとで瀉血しゃけつの技術を学ぶ。パリに出たケネー

は、母の奨めもあり、当時流行の職業であった版画家となる修行を積んだ。ケネーは、パリ大学医学部とサン=コーム外科医学校に籍を置いている。23歳となる1717年に、ケネーは結婚し、パリ近郊のマント市で外科医となった。その6年後、王室外科医の免許を得て、組合の正式の開業資格を得ている。外科医ケネーは、内科医シルヴァとの、瀉血の効果をめぐる論争によって有名となる。瀉血とは、病気の治療のために、血液の一定量を取り除くことである。40歳となる1734年に、ケネーはパリに出て、リヨンを統治していたヴィルロワ公の侍医となる。ケネーはリヨン文芸科学アカデミーに推挙され、『動物整理に関する自然学的試論』(1736年)を出版して、好評を博す。

55歳となる1749年に、外科医ケネーは国王ルイ15世の寵姫ポンパドゥール侯爵夫人の侍医となり、ヴェルサイユ宮殿に居住するようになる。1751年に科学アカデミー会員に推挙され、ヴェルサイユ宮殿の「中二階」にはダランベールやディドロなどが出入りした。ケネーは62歳の時、ディドロの依頼により、『百科全書』のために、「借地農論」(1756年)を書いた。彼はここで、フランス農業の改革ヴィジョンを提示した。翌年には、「穀物論」(1757年)を発表した。こうした中で、『経済表』「原表」(1758年)は、ヴェルサイユ宮殿の印刷所で印刷された。しかし、ケネーが70歳となる1764年に、ポンパドゥール侯爵夫人が亡くなり、彼は王宮内での後ろ盾を失った。1774年、5月にルイ15世が逝去し、12月にケネーは80歳で亡くなった。

Ⅲ コルベール主義批判

外科医ケネーが『経済表』(1758年)を印刷した頃、フランスの経済政策を支配していたのはコルベール主義であった。当時のフランスは、絶対王制の時代であり、国王ルイ15世(1715-74)の統治下にあった。フランスの絶対王制の頂点は、ヴェルサイユ宮殿を建てたルイ14世の統治であったが、封建制が地方分権的であったのに対し、絶対王制は国王が中央集権の権力を集中させようとした。絶対王制は、国王が直接人民を統治するために、強力な官僚機構を必要とした。ルイ14世(その治世は1643-1715)のもとで、財務総監ジャン・バプティスト・コルベール(1619-83)は、典型的な絶対王制的重商主義政策を行った(岡田,1978,11-13)。

イギリスやオランダなどの列強との対抗関係の中で、コルベールは、フランス財政の基盤であるフランス国民経済の形成をはかろうとした。彼は、貿易差額(輸出-輸入)がプラスになれば、国内に多量の貨幣が流入して、国富は増大すると考えた。そのために彼は、低賃金政策による輸出拡大と関税政策による輸入制限を実施した。国内の産業を保護育成して国際競争力の増大をはかる政策をとった。植民地経営と外国貿易のための特権的貿易会社を設立し、官僚行政機構を通して、特権商人に国王からの補助金を与えて特権マニュファクチュールを作らせ、王立のマニュファクチュールも設立し、商工業の振興をはかった。こうした国家による商工業の振興により、外国貿易に関わる独占的な特権商人は大きな利益を得ることができた。しかし、農民たちは、過酷な租税や低穀物価格政策と低賃金政策により、貧困のままであった(岡田,1970,12-15)。

ケネーは「借地農論」(ケネー,1952,1-45)において、馬耕三圃制による大農経営と牛耕二圃制による小農経営とを比較し、馬耕の方が効率的であり、優れていることを実証した。当時のフランスでは、牛耕による貧しい小農経営のもとで耕作されていた。しかも当時のフランスで支配的な小作制は、分益小作制であった。これは、収穫の一定割合を小作料として支払わなければならないため、小作農民の生産性向上への意欲を喚起するものではなかった。これに対して、定額小作制は、小作農民の意欲を喚起し、収穫を増進しようとする努力を促進するものである。彼は、生産効率の悪い分益小作制のもとでの牛耕二圃制というフランス農村の現状を改革し、定額小作制のもとでの馬耕三圃制の導入を提唱した。ケネーは、コルベール主義批判という明確な問題意識のもとに、「富裕なフェルミエ(借地農)による大農経営」のヴィジョンを提示したのである。

ケネーは「穀物論」(ケネー,1952,46-131)において、コルベール主義の商工業重視政策を批判した。ケネーによれば、農業は根幹であり、商工業は枝葉である。しかるに、コルベール主義では、枝葉である商工業にのみ眼を奪われて、根幹である農業を軽視している。都市の繁栄と、貨幣の蓄積にのみ眼を奪われて、奢侈と過度の支出に陥っている。コルベール主義では、一国の経済は、やがてその根幹において疲弊してしまうであろう。ただし、農業経営が改良されたとしても、穀物の流通が機能しなければ、元も子もない。その意味で、根幹の農業と共に、枝葉の商工業も必要であるとされた。

また、ケネーは、穀物価格に関して、良価=生産費+利潤、という「良価」の理論を提示した。彼は、「良価」の実現のために、恣意的で過酷な課税の廃止と、穀物取引の自由化を提唱した。

このような、「富裕なフェルミエ(借地農)による大農経営」のヴィジョンは、その後のケネー経済思想に一貫したものであった。しかし、「ケネー経済表以前の諸論稿」には、理論モデルが備わっていなかった。まさに『経済表』は、ケネーの経済思想における理論的な保護帯として提示された、ということができるであろう(井上,2013,299)。

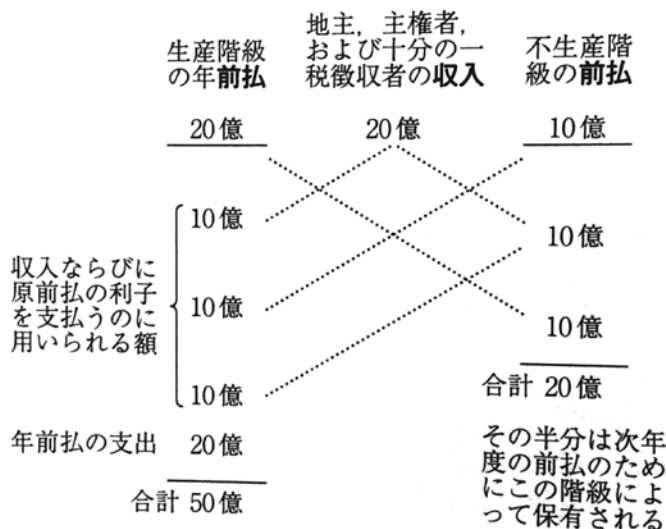
IV 「経済表」の経済循環

ケネーの『経済表』には、成立順に、「原表」(1758年)、「略表」(1763年)、「範式」(1767年)という3種類があるが、ここでは、『経済表』の完成形態とされる「経済表の範式」(図は、ケネー,2013,121)を取り上げて検討する。

「経済表の範式」(以下、「経済表」という)には、次のような前提がある。「経済表」とは、当時のフランスの現実の社会ではなく、仮想的な「農業王国」のモデルを提示しようとしたものであった。その国土面積は約1億3,000万アルパンであり、この国土を良好な状態に維持するために必要な経営的富の基本は、約120億(ルーブル、以下同じ)であり、人口は約3,000万人である。商業の自由競争と農業の経営的富の所有権に関する完全な保証とが常に存在して、穀物の輸出自由化と、穀物価格の「良価」(=生産費+一定の利潤)が実現している。ケネーの「農業王国」では、大規模な農業経営が行われている。(ケネー,2013,110-111)。

経済表の範式

再生産総額50億



ケネーは資本を「前払」として把握している。年再生産の生産費である「回収」とは、年々の投資のことである。「土地前払」とは、土地の維持や改良のための投資であり、これは地主階級が負担する。「原前払」100億は、資本投下の最初において必要な投資であり、一種の創業資本である。これには固定資本としての家畜や道具の他に、最初の年に必要な種子、賃金も含まれている。「原前払の利子」10億は、最初に投下される固定資本の償却費である。固定資本の耐用期間は10年、毎年10%の比率で年々償却される。「年前払」20億は、賃金や種子、役畜の飼料などであり、毎年再生しては消費されてしまう。これはほぼ流動資本のことである。「年前払」20億に対する「純生産物」20億の比率を表す「純生産率」は100%と仮定されている（大野,1988,54）。

ケネーの「経済表」の社会は、3つの階級から構成される。①生産階級、②不生産階級、そして③地主階級の3つである。第1の生産階級は、大規模借地による大農法の経営主体としての富裕なフェルミエ（借地農）により構成される。生産階級は、「純生産物」を生み出す唯一の階級である。第2の不生産階級は、商工業者から構成されるが、彼らは農業生産物の形を変えて加工品を作るに過ぎない。これは、有用な部門ではあるが、「純生産物」を生まないという意味において、不生産的な部門とされている。第3の地主階級は、主権者（国王）、僧侶（10分の1税徴収者）、そして貴族（土地所有者としての地主）から構成される。

「経済表」では、農業部門だけが「純生産物」を産出しようと規定する。純生産は、そこのみ租税が課されるべきファンドを形成している。こうした理論に基づき、ケネーは「単一地租税」の導入をした提唱した（井上,2013,302）。

「経済表」の生産階級は、20億の「年前払」と10億の「原前払の利子」との合計である30億

の年間投資=年基本の投下によって、毎年50億の農産物を生産する。「純生産物」は20億である。期首の段階で、地主階級は生産階級から受け取った地代20億を貨幣で所持している。不生産階級は「年前払」10億を貨幣で所持している。以下、「経済表」の経済循環は次のようになる。

まず、不生産階級は、前年度から持ち越した「年前払」10億の貨幣を支払い、生産階級から原料を購入して、加工品20億を生産する（井上,2013,297）。（これは向かって右上の下線を引いた10億から生産階級の10億に引かれた左下がりの点線で示される。）ここで、10億の原料を使い加工品20億を仕上げる不生産階級の活動は、次年度へは10億の「年前払」しか残さないのが不生産的とされているのである（大森,1989,31）。地主階級は、地代収入20億の貨幣のうち、その半分である10億を生産階級に支払い、生産階級から食料を購入して消費する。（これは中央から左下がりの点線で示される。）地主階級は、残りの貨幣10億を不生産階級に支払い、不生産階級から加工品を購入して消費してしまう。（これは中央から右下がりの点線で示される。）不生産階級は、地主階級から受け取った貨幣10億を生産階級に支払い、食料を購入して消費する。（これは右側中段から左下がりの点線で示される。）

生産階級は地主階級と不生産階級との取引により貨幣30億を受け取るが、そのうちの10億の貨幣は「原前払の利子」である。減耗した原前払の補填用として、不生産階級から加工品10億を購入するために支払われる。（これは左上の下線を引いた20億から右下がりの点線で示される。）残りの20億の貨幣は、生産階級から地主階級へ地代として支払われる。（これは表に点線で示されていない。）こうして、経済循環は完結する。期末には期首と同様の状態が再現し、単純再生産が繰り返される（新村,2001,24-25）。

「経済表」には単純再生産の世界が描かれていたが、その場合、地主階級は、その地代20億を折半して、10億を生産階級へ、残りの10億を不生産階級へ支出すると仮定されていた（井上,2013,295）。もし、地主階級が10億以上を生産階級に支出したとすれば、「純生産物」は20億以上に増加することになるであろう。今、地主階級の地代収入から生産階級へ支出される比率を λ とすれば、 λ が2分の1以上の場合は、拡大再生産となるであろう。逆に、 λ が2分の1以下の場合は、縮小再生産となるであろう（根井,2005,37）。

V むすび — 社会改革のヴィジョン —

本稿の結論は次の通りである。Ⅱでは、ケネーの生涯を概観することを通して、ケネーの経済思想の形成過程を考察した。Ⅲでは、ケネーのコルベール主義批判について考察した。ケネーの「富裕なフェルミエ（借地農）による大農経営」というヴィジョンは、すでに「経済表」以前の諸論稿において提示されていた。しかし、「経済表」以前の初期段階では、ケネー経済思想における理論的な保護帯は、いまだ装備されてはいなかった。Ⅳでは、「経済表」をケネー経済思想における保護帯としての理論モデルと理解した上で、「経済表」の経済循環について考察した。ケネーの経済思想の最大の特質は、社会改革のヴィジョンの中にあり、ケネーの経済思想の現代的意義

は、コルベール主義的な農業軽視政策を批判する点にある、との見解を提示した。

ケネーは、高賃金のための穀物の輸出入の自由化を提唱して、「良価」の実現による高価格と高賃金によって、農村の貧困問題は解決可能であると考えたのである。農業重視はケネーの経済思想の特質の一つではあるが、農業のみが生産的労働であるとの見解は、ケネーの経済思想の限界でもあった。ケネーの経済思想の最大の特質は、農業生産重視の見解の中ではなく、社会改革のヴィジョンの中にあった。コルベール主義の外国貿易重視・商工業重視の政策によっては、農村の疲弊を避けることはできない。だからといって、農業を過度に保護する政策は、貧しい分益農による小農経営を保護することになりかねない。

ケネーは、「富裕なフェルミエ（借地農）による大農経営」が支配的になることによって、国民も国家も共に豊かになることができると考えた。彼は、「単一地租税」の導入を提唱して、富裕なフェルミエ（借地農）が安心して資本を農業に投下できるような社会を構想した。その際、ケネーは、専制君主を啓蒙することに望みを託して、上からの社会改革の処方箋を提示しようと模索した。この点は、ケネー経済思想の限界として指摘しておきたい。後に、アダム・スミス（1723-90）は『国富論』（1776年）において、ケネーの経済思想を重農主義と規定した上で、重商主義と重農主義に対する両面批判を展開することになる。フランス革命が勃発するのは、ケネー亡き後の、1789年のことである。

[参考文献]

- F.ケネー. 1952.『ケネー全集』第2巻,島津亮二・菱山 泉訳,有斐閣。
- F.ケネー. 2013.『経済表』平田清明・井上泰夫訳,岩波文庫。
- 井上泰夫. 2013.「訳者解説：ケネー経済表と21世紀の経済学」『経済表』岩波文庫。
- 大野忠男. 1998.『経済学史』岩波書店。
- 大田一廣. 2005.「フランソワ・ケネー」坂本達哉編『経済思想3 黎明期の経済学』日本経済評論社。
- 大田一廣. 2006.「フランソワ・ケネー」大田一廣・鈴木信雄・高 哲男・八木紀一郎編『新版 経済思想史』名古屋大学出版会。
- 大森郁夫. 1989.「資本主義化の過程と経済学」早坂 忠編『経済学史』ミネルヴァ書房。
- 岡田純一. 1970.『経済思想史』東洋経済新報社。
- 岡田純一. 1978.「フランソワ・ケネー」水田 洋・玉野井芳郎編『経済思想史読本』東洋経済新報社。
- 岡田純一. 1982.『フランス経済学史研究』御茶の水書房。
- 新村 聡. 2001.「市場経済の発展と古典派経済学」中村達也・八木紀一郎・新村 聡・井上義朗『経済学の歴史』有斐閣アルマ。
- 根井雅弘. 2005.『経済学の歴史』講談社学術文庫。
- 菱山 泉. 1990.『ケネーからスラッファへ』名古屋大学出版会。